様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月２４日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19860082
研究課題名（和文）高齢者の愛着からみた住み続けられる近隣環境の評価

研究課題名（英文）　Evaluation of Neighborhood Environment for the Elderly from the Viewpoint of Place Attachment

研究代表者
加藤　悠介（KATO YUSUKE）
豊田工業高等専門学校・建築学科・助教
研究者番号：80455138

研究成果の概要：本研究では、高齢者の近隣環境への愛着の実態について、インタビュー調査に基づき、肯定的な感情を含むエピソード場面である愛着場面から分析した。主な結果は以下の通りである。1）自宅近くにある公園・神社・路地で愛着場面数が多いことがわかった。2）近所や友人とのつきあいが円滑な高齢者は愛着場面数が多いことがわかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,010,000	0	1,010,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,310,000	390,000	2,700,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画
キーワード：近隣環境への愛着、高齢者、エピソード場面

１．研究開始当初の背景

近年、高齢者の介護環境の整備が進むなかで、生活の質（以下 QOL と略す）が問題とされるようになり、高齢者が主体的に生活できる居住環境が求められている。特に高齢者が住み慣れた地域に自立して生活を継続する重要性が指摘されており、そのためには、高齢者が日常生活において気軽に訪れることのできるヒューマンスケールな近隣環境が必要である。その中でも、高齢者の QOL の心理的側面にも配慮した、「愛着」を持つことのできる居場所が重要である。

しかし、高齢者が QOL を維持しながら住み続けられる近隣環境の質をどのように評価していくかは十分に明らかになっていない。

２．研究の目的

住み続けられる近隣環境の質的要件を整理するための基礎として、本研究では、近隣環境への愛着に関する実態を把握することを目的とする。

３．研究の方法

(1) 調査概要

本研究では、近年、閉じこもりなどが問題となっており、近隣環境への愛着が重要な役割を持つと考えられる独居高齢者を対象にする。具体的には、愛知県 A 市内に住む、独

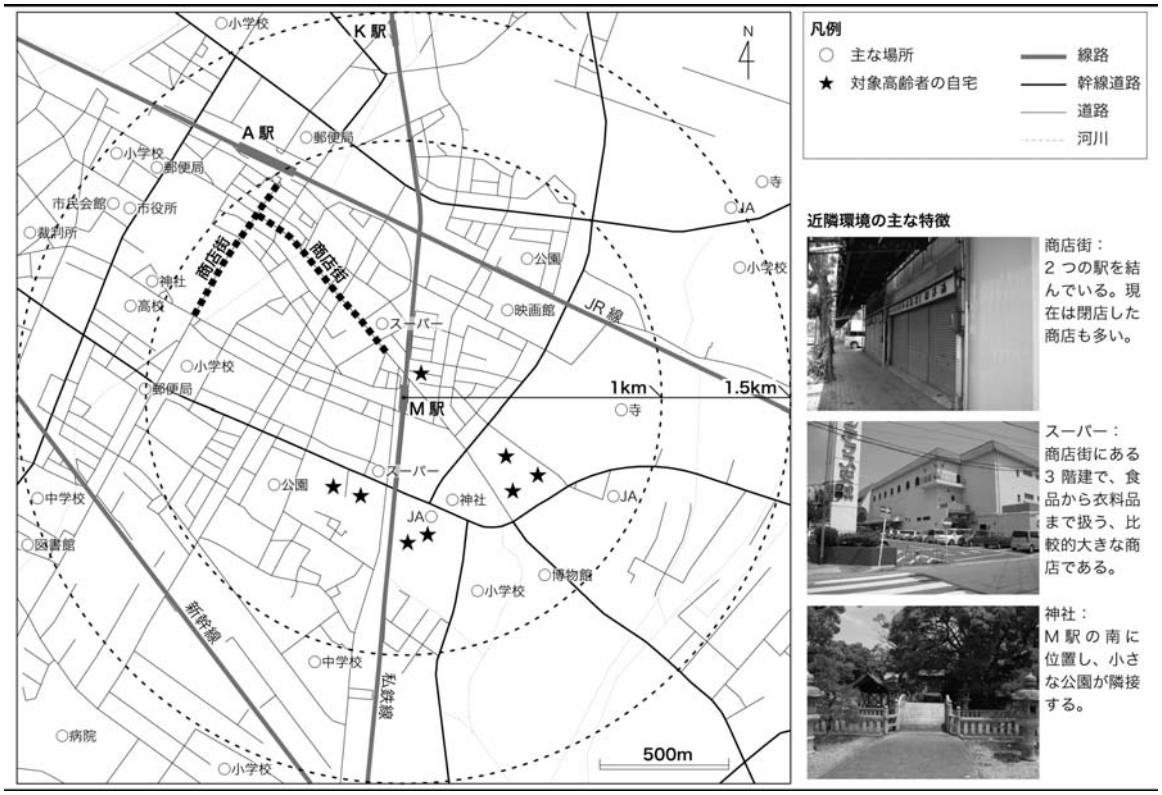

図１　対象近隣地域

居高齢者８名の自宅を訪問し、インタビュー調査により、日常生活でよく行く場所や、よく行った場所、思い入れのある場所、親しみのある場所について聞き取った。対象高齢者には場所での行動や行く頻度、誰と行くのか、思い出に残っている出来事など、場所に関係する事柄を自由に語ってもらった。また介護度などの高齢者の属性や、近所づきあいなどの近隣社会との人的関係の円滑さに関するアンケートを同時に行った。調査時間は１人あたり１時間程度とし、IC レコーダーで録音した。なお、対象高齢者には調査で得られた結果を研究目的以外に使用しないこと、個人を特定しやすい氏名などの情報はアルファベットで置き換えるなどの配慮を行うことを条件に同意を得た。

調査後、分析データとしてエピソード場面を抽出した。具体的には、高齢者の発話の中から、「いつ／どこで／誰が／誰と／何をした」という高齢者が体験した場面として成り立つ箇所を特定・抽出し、整理した。

(2) 対象近隣地域

図1に本研究の対象近隣地域の地図と主な特徴と対象高齢者の自宅の位置を示す。近隣地域を高齢者の徒歩移動圏とし、本研究では対象高齢者の多くの最寄り駅となっているM駅を中心にして、3km四方の範囲とした。

近隣地域には、3つの駅（A駅･K駅･M駅）があり、A駅とM駅を結ぶ商店街がある。商店街では、付近に大型ショッピングセンターが新設されたことなどによる影響で閉店する店もあるが、スーパー（3階建て）など比較的大きな商店もあり来店者は多い。

商店街の他に、近隣地域には、市民会館や図書館、博物館などの公共施設やスーパー、映画館、神社・寺，公園などがあり、機能的側面からみると日常生活を送る上では十分な数の場所が整備されていると言える。

４．研究成果

(1) 愛着場面のタイプ

本研究では、発話されたエピソード場面を内容別に、生活基本、趣味・習慣、交流、印象の4つのタイプに分類した（図2）。エピソード場面のうち楽しいなどの肯定的な感情を示す発話が含まれたもの、発話前後の文脈から高齢者の肯定的な感情を読み取れたものを抽出し、「愛着場面」とした。

図2に場面タイプ別の愛着場面数と総場面数を示す。最も愛着場面数の多かった場面タイプは、趣味・習慣で、次いで交流であり、これらは総場面数と愛着場面数が大きく変わらないことから、愛着が生まれやすい場面タイプと言える。一方生活基本をみると、総場面数が多いにもかかわらず愛着場面数は少なかった。

続いて、図6に示す典型的な高齢者の愛着場面を参照しながら、その特徴や、高齢者の属性および人的関係の円滑さとの関係について考察する。

図２　場面タイプ別の愛着場面数

(2) 場所の種類ごとの愛着場面数

図3に、場面タイプ別愛着場面数を示す。近隣地域内にある場所では、公園・神社・路地で最も多くの愛着場面が生じており、特に趣味・習慣と交流が多かった。図6の高齢者Aの場面②のように、散歩などの途中で立ち寄りやすく、そこでは散歩以外にもお参りや井戸端会議（立ち話）など多様な場面が生じやすいためと考えられる。

また、商店は総場面数は多いが愛着場面数は少ない結果となり、生じた場面が愛着へとつながりにくい場所と言える。図6の高齢者Aの場面⑩や高齢者Gの場面⑨のように、スーパーのような商店では、食料を購入するといった単一の場面しかみられないことが影響していると考えられる。

図３　場所の種類ごとの愛着場面数

(3) 現在の訪問頻度ごとの愛着場面数

A市内において、場面が生まれた場所への現在の訪問頻度ごとの場面タイプ別愛着場面数を図4に示す。訪問頻度により愛着場面数に大きな違いはみられず、現在は訪問していない

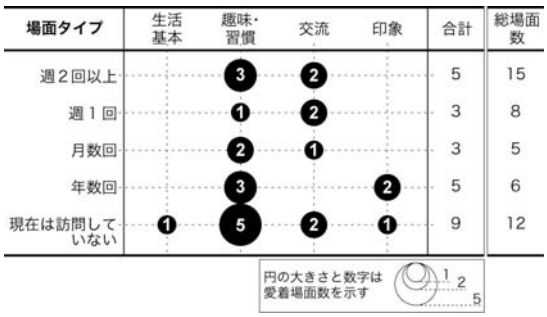

図４　現在の訪問頻度ごとの愛着場面数

場所でも愛着場面数は多かった。例えば、図6の高齢者Aの場面⑧、⑨のように、友人と自転車で自宅から少し離れた娯楽施設へよく行ったが、足を悪くしたため自転車を乗ることができなくなったケースがみられた。身体能力が低下しても、愛着のある場所に行くことのできる状態にあることがQOLの維持には望ましいと思われ、バスなどによるきめ細やかな交通網が整備されていることが重要であると考えられる。

(4) 同伴者ごとの愛着場面数

エピソード場面に存在する同伴者ごとの場面タイプ別愛着場面数を図5に示す。同伴者がいない場面が最も多かった。それ以外の特徴としては友人では趣味・習慣が多く、近隣住民では交流が多い傾向がみられた。図6の高齢者Aの場面⑥のように自宅近くに住んでいる趣味の合う友人と一緒に映画鑑賞に行くことや、図8の高齢者Aの場面⑤や，高齢者Gの場面⑦のように、定期的に通う診療所のかかりつけの医師と親しくなり交流することで愛着が生まれる場面がみられた。これらのことから、近隣地域内において、友人と一緒に出かけたり、顔なじみに出会えることによって、愛着場面が生まれやすくなっていると言える。

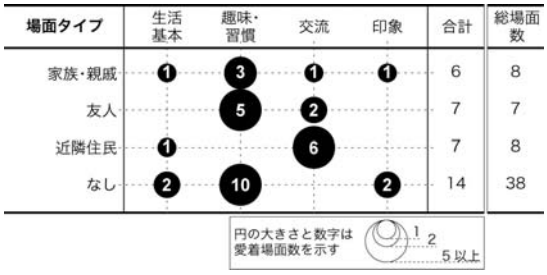

図５　同伴者ごとの愛着場面数

(5) 要介護度と平均愛着場面数

図7に要介護度と平均愛着場面数を示す。対象高齢者のうち、要介護1・要支援が2名、受けていないが3名、不明が3名であった。

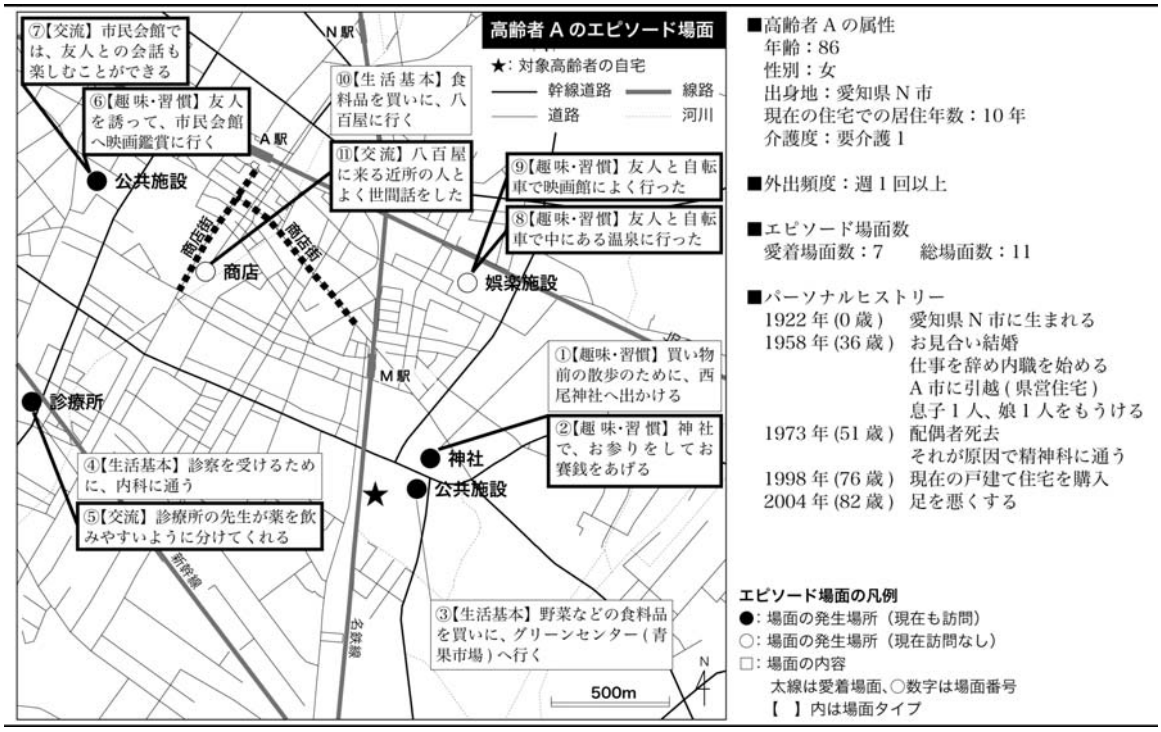

図 6 (a)　高齢者 A の愛着場面事例

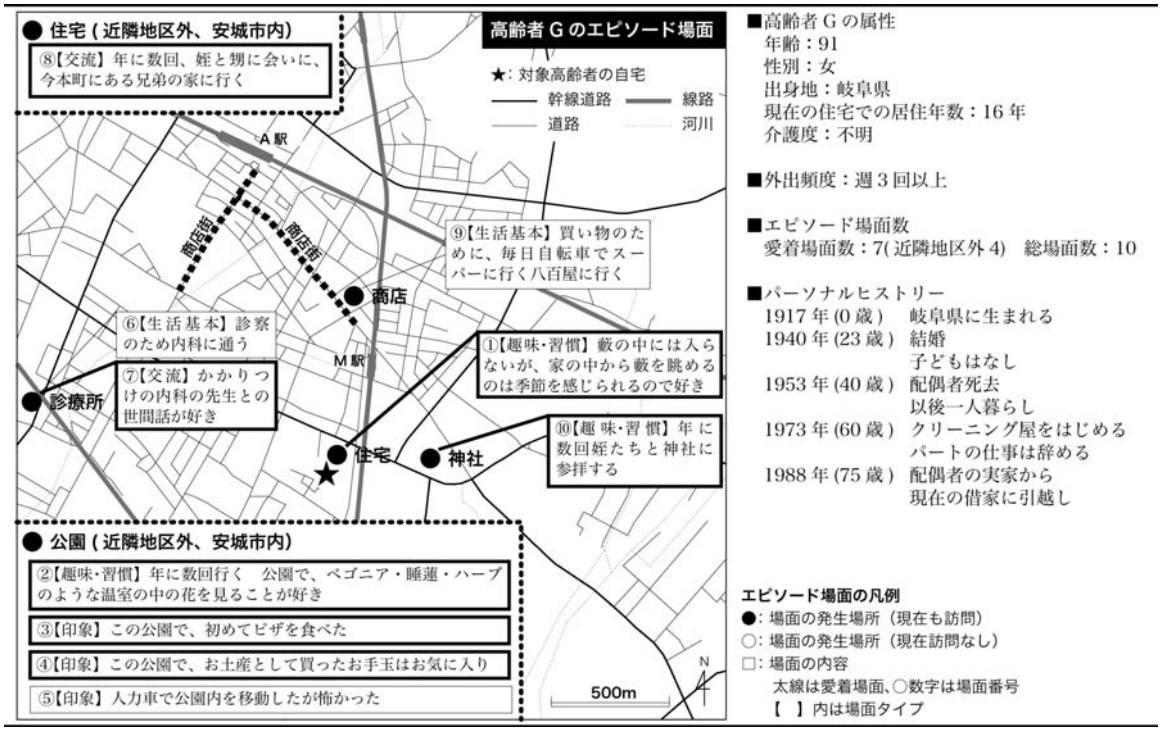

図 6 (b)　高齢者 G の愛着場面事例

要介護1・要支援で平均愛着場面数が最も多かった。健常高齢者と比較して、軽度の要介護高齢者は必ずしも愛着場面が少なくないと言える。これは、先述した現在訪問していない場所でも愛着場面が生じることに加えて、図6の高齢者Aの場面②や⑤のように、自宅の近くに散歩などの趣味・習慣で行く場所があったり、頻繁に通う診療所などが交流の場所となっているためと考えられる。

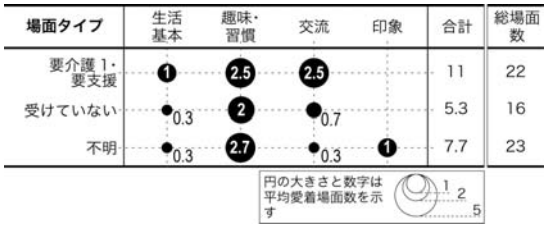

図７　要介護度と平均愛着場面数

（6）近所づきあいと平均愛着場面数

図8にアンケート質問「近所づきあいはうまくいっているか？」への回答ごとの平均愛着場面数を示す。そう思うと回答した高齢者が3名、どちらとも言えないが2名、そう思わないが3名であった。結果は、近所づきあいがうまくいっていると回答した高齢者は平均愛着場面数が最も多く、特に趣味・習慣と交流で他の高齢者に比べ多かった。

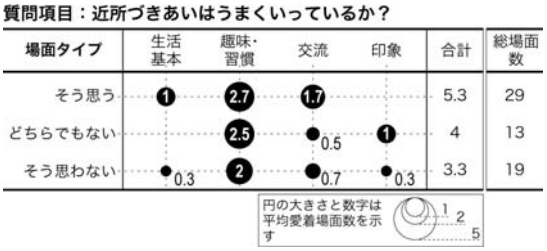

図８　近所づきあいと平均愛着場面数

（7）友人とのつきあいと平均愛着場面数

図9にアンケート質問「友人とのつきあいはうまくいっているか？」への回答ごとの平均愛着場面数を示す。そう思うと回答した高齢者が2名、どちらとも言えないが1名、そう思わないが5名であった。結果は、友人とのつきあいがうまくいっていると回答した高齢者は平均愛着場面数が最も多く、趣味・習慣と交流で他の高齢者に比べ多かった。

以上のことから、近隣地域に住む独居高齢者の愛着場面を生まれやすくするには、近所や友人とのつきあいがうまくいっていることが重要で、場所以外にも人をつなぐための社会的ネットワークも十分整えられている必要があると言える。

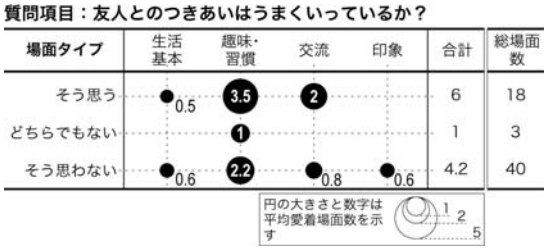

図９　友人とのつきあいと平均愛着場面数

（8）結果のまとめと今後の展望

本研究で得られた主な結果を以下に示す。

①愛着場面をその内容から、生活基本、趣味・習慣、交流、印象の4タイプに分類すると、趣味・習慣と交流の愛着場面数が多い。

②近隣地域における愛着場面の特徴をみると、自宅近くにあって散歩などで立ち寄りやすい公園・神社・路地で愛着場面数が多いこと、趣味の合う友人と一緒に出かけたり、顔なじみと出会う場面で愛着が生まれやすいことがわかった。

③軽度の要介護高齢者であっても、自宅の近くにある場所や診療所などが趣味・習慣や交流の場となっている場合は、健常高齢者と愛着場面数は少なくないことがわかった。

④近所や友人とのつきあいが円滑な高齢者は愛着場面数が多く、愛着を持ちやすくするには、社会的ネットワークが十分整えられている必要があることがわかった。

本研究では、独居高齢者８名の近隣環境への愛着の実態を、対象者と密に対話をするインタビュー調査から質的に分析することに成功した。今後は、サンプル数を増やすとともに、独居高齢者と、家族と同居している高齢者または、車いすの使用や歩行が困難である重度の要介護度を持つ高齢者との比較を行う予定である。

これらの結果を基に、高齢者が身体に障碍を持つことや、家族を失い独居の状況となっても、愛着を持ちながら QOL の維持ができる近隣環境の質的要件を整理し、その評価項目について開発していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 加藤悠介、岡田亜実、加藤尊士、吉村祐一、ひとり暮らし高齢者の近隣環境への愛着に関する実態調査、豊田工業高等専門学校研究紀要、第 41 号、pp.121-126、2008、査読無し

〔その他〕
研究室ホームページ
http://www.arch.toyota-ct.ac.jp/~ykato/

６．研究組織
(1)研究代表者
加藤　悠介（KATO YUSUKE）
豊田工業高等専門学校・建築学科・助教
研究者番号：80455138